

緒莉  
西水島多也

恥辱の制服



# 恥辱の制服



著：緒莉

画：水島☆多也  
原作：BISHOP

CB オトナ文庫







健一が見ているのは、アダルトサイトのやらせ動画などではなかった。これはリアルタイムで実際に行われている着替え、つまり盗撮している映像だから、彼女もつたいぶった真似をすることはな  
限られた時間を有意義に使おうと、健一はすぐさまジャージの文ボムから朝物  
ちを引きずった。ペニスを取り出し、ぐつ  
と振った。  
マスクメロンを思わせるボリユーミー  
な乳がひしひしと、先端の突起がチラチラ  
と閃光を放っている。健一は舌根めすり  
をして肉棒をしくく動きを運ぶ。  
「ひひっ………あんなに挿み込むようにし  
て、まるでチチでオナニーしているみた  
いじゃないか

あの乳に、触ってみたい。どこまで指が洗むのか、むぎやううと振って確かめてみた  
い。いや、手で触るだけでなく、あの谷間にペニスを挿んで埋めさせてみたい。  
健一は、乳幼児だった頃を除いて、女の胸に触ったことなど一度もなかった。この先も  
触ることはないような気がしている。  
一度だけはい、あの胸を心ゆくまで味わってみたい。その感覚は未知のもので、だ  
からこの世の中では想像がどこまでも膨れ上がり、強い興奮を呼び起こす。彼女が胸を  
揉まれ表情を歪ませる様子を想像する。腰が震えてくるほどに興奮が大きくなった。  
「おっ、おっ………明美さん………明美さん………明美さん………おっ、おっ………」  
夢中になっていくうちに、痺れるような感覚が肉棒に走った。画面の中で、彼女はま  
だ着替え続けている。極上の眺めを画面に焼き付けながら、健一は根元から込み上げてき  
た熱い衝動に身を任せた。

第一章 子持ちの人妻を後ろから犯せ!

限界まで硬直してしまったペニスから飛んだ精液は、欄のように濃厚だった。勢いもすご  
かったものだから、肌も床もすっかりべたべただ。  
健一は慌ててティッシュの箱を手元に引き寄せ、モニターを丁寧に拭いた。部屋自体は  
正直どうでもいいが、モニターはさすがに故障なんてしたら、お宝映像が見られなくなっ  
てしまう。

ついだからと肌や床も適当に拭き、ティッシュを丸めてゴミ箱に放り入れる。中が  
いっぱいだったものだから、それはパウンドしてゴミ箱から飛び出し、床に落ちた。拾うの  
も面倒で、そのまま放っておく。  
寝起きのオナニーは、やはり量も粘度も半端ない。健一は人並み外れて性欲が強いのだ。  
毎日朝晩オナニーを欠かさないし、一度では足りず、二、三発連続で発射することも日常だ  
った。  
スッキリしたところで立ち上がり、うーんと伸びをする。一人暮らしとしては無駄に広

い部屋は、まったく掃除されていない。誰か訪ねてくるわけでもないで、綺麗に保つ意  
義が感じられないのだ。とはいえ、弁当の残りが腐ってはいやだし、ゴミくらい出して  
くかど、机の脇に転がっていた五十枚入りのゴミ袋を一枚取り出す。  
住み始めて一ヶ月になるこの部屋の家賃を、健一は知らない。なぜなら借り主が健一で  
はないからだ。

部屋の主は、健一とは学生時代からの付き合いである早川悠斗という男だ。健一の唯  
一の友人と言ってもいい早川が交通事故でひどい怪我を負ってしまい入院したのは、一ヶ月  
前のことだった。

早川は、父親から継いだ電器屋を営んでいる。電器製品の販売よりも、その修理や設  
置を主な業務としている。小さな電器屋だ。修理や点検の手約を全部断り何ヶ月も店を閉  
めたりにして店が潰れてしまふ、頼むからしばらく、何を何とか回してくれないかと、早川  
が見舞いに行った健一に泣き付いてきたのが、すべての始まりだった。

早川と健一は、学生時代に同好会で一緒に機織りしていた仲だった。卒業後も  
健一は早川が忙しくて手が足りない時に何度か仕事を手伝ったことがあった。  
短期バイトを頼ぐようなフワフワした生活をして、いた健一にとって、一時的なことはい  
え店をまるごと引き受けるのは勇気のいることだった。それでも、月五十万と報酬が破  
格だったものだから、最終的に首を縦に振った。店への郵便物が届いてしまうことがある

から、自宅の郵便受けも定期的に確認して欲しい、面倒ならそのまま任んできていい、  
ということ、それも引き受け。

始めてみれば、真つ面に働くのはやっぱり面倒だったが、舞い込む仕事自体は簡単な修  
理ばかりで、思いのほかラクができていた。早川のマンションは、健一がこれまで住んで  
いたアパートよりもずっと高級で、生活はすこぶる快適だ。  
それに何より、電器屋だからこそできる、最高のお楽しみにもありつけた。  
まるで、今まで損な役回りばかりだった人生のツケが一気に返ってきたように、健一は  
久しぶりに充実した毎日を送っていた。

「うおっ、やばっ」  
モニター画面右下に表示されている時刻が目にとまり、健一は慌てて立ち上がった。遅  
刻ギリギリというほどではないが、きつと出かける準備をしないと開店時刻に間に合わ  
ない。  
足早にエレベーターホールへ向かっている途中、背後からドアの開く音とともに、覚え  
のある声が聞こえてきた。

「おはようございます、これからご出勤ですか」  
振り返ると、ついさっきモニターの向  
こうで素肌を晒していた女、藤沢明美が  
ここに微笑んでいた。  
「あうっ、お、おはよう、ございます……  
っ！ま、まあ……そんな、とこです」  
どうしようもないやり取りなのに、  
どもつてしまうのは、いつものことだ。  
明美の顔がまともに見られない、着替  
えを盗み見た後ろめたさもあるが、健一  
はそもそも女が苦手だった。学生時代か  
ら、女子との会話はほとんどなかった。会  
話どころか、避けられ、興味惹かれ、思  
ひ悩まれながらこれまで生きてきたのだ。  
おかげで、いい年になつた今でも、健一  
は女とのコミュニケーションの取り方が  
さっぱりわからなかった。そのせいで、女  
というか女性に対する興味は人一倍強い



12  
「おはよう、この前直してくださった給湯器なんですか」  
「ふひっ」  
健一は表情を引きつらせた。心臓が痛いくらいにドキドキしてくる。  
「あれからすぐ調子がよくて助かっています。本当にありがとうございます」  
「あ、そうですか、それはよかったです」  
健一はホッと胸を撫で下ろした。自分のしたことがバレたのではなかったようだ。  
「私、機械のことはまるでわからなくて……専門の人がご近所にいるなんて、すごく心強  
いです。困々してすけど、電気製番のことでもた何かあったら、お願いしますね」  
「は、はい……！お役に使います」  
健一が初めて明美と会話をしたのは、一週間ほど前のことだった。明美が部屋から出て  
きたところに偶然通りかかった彼女の方が話しかけてきたのだ。「取川電器」という制  
編の人つた作業着を着ていたものだから、明美とは確見知りである早川の場合だと思っ  
たらしい。そしてそれは正解だった。  
相談したいことがあるというので聞いてみると、給湯器の調子が悪くお湯が出なくなっ  
てしまったのだという。オムツを穿いている赤ん坊がいるため、一日でもお湯が出ないと  
とても困ると言うので、健一は明美の家に上がり、脱衣所に設置されている給湯器をすぐ

13 第一巻 子持ちの人間を後ろから見た！  
見てやることにした。  
この時、たまたま健一は小型のカメラをいくつか作業用の鞆に入れて持っていた。無線  
式の最新型で、ネット通信を介して離れたところからパソコンで映像を見られるシロモノ  
だ。それは防犯のため、店の駐車場に設置しようとしていたもので、悪用しようなんて思  
つちやいなかった。  
しかし、魔が差したということなのだろうか。作業中に赤ん坊が泣き出し、世話をす  
るため明美が脱衣所を出た時、健一はふと思ってしまった。  
カメラは小さい。給湯器の空きスペースにちょうど工夫して仕込めば、見つかること  
はないんじゃないだろうか。  
そしてほとんど衝動のままに、健一はカメラを仕掛けてしまった。自分でも驚くほどの  
手際のよさだった。  
一つ仕掛けてしまったことで勢いがつき、明美が赤ん坊の汚れた尻をシャワーで流して  
いる間に、夫婦の浴室に忍び込んでそこにまで隠しカメラを設置した。  
このマンションは、全帯に無線LANが完備されている。おかげでこの一週間、健一は  
明美の着姿や裸を何度も盗み見ることができている。もちろん明美は健一のしているこ  
となどまったく知らないのだ。迅速に、しかも無料で給湯器を修理したことになんか感謝  
してくれていて、その時以来気さくに接してくれている。

「明美と話す、心が和む。まるで聖母のようだといつも思う。健一がいくらどうもうが、赤面してよ見しようが、明美は絶対に剛突したり罵んたりしない。いつだって屈託なく微笑み、優しく話を聞いてくれた。」

「しかしそんな明美にも、健一には「ただ許せないことがあった。その「点さえなければ、本当に完璧な人なのに、心から残念に思っている。」

「あら、あなた」

「唐突に、明美が健一の後方に視線を向け、驚いた顔をした。」

「どうしたの？ 忘れ物でもしました？」

「あなた」

その単語を聞いた瞬間、健一の心の中に照り込みができた。

「ああ、今日の会議で使う書類を忘れてしまっただけ。ハハッ、僕としたことが、うっかりしていたよ」

「インテリゲンチーな男が、健一の横を通り過ぎ、馴れ馴れしく明美に近寄っていく。男の名は、徳沢誠。思わしいことに、明美はこの男の妻なのだ。」

「もうあなた、しっかりしてください。今日の会議はとっても重要なんで、言っちゃいけないですよ」

「だから途中で思い出して戻ってきたんじゃないか。大丈夫、まだ間に合うよ」

「いかにもエリートという感じの男。つまりは健一の一番嫌いなタイプの男が、当たり前のように明美の肩に手を置く。男の触れたところから明美が汚れていくようで、見ているとムカムカした。」

「クソッ、夫ツラッやがって……」

激しい嫉妬の炎を燃やしている視線に気付いたのか、誠二はいぶかしげに健一を見た。

「何だ、君は僕に何か用か？」

「い、いえ……べ、別に……」

「そうか、ならそんなにジロジロ見ないでくれ。それと、今まで僕の妻と話をしていたよ。うだが、何かおかしな真似はしていないだろうな？」

「ぐっ……」

「あからさまに不審者を見る目で見られ、怒りで健一の目の前が真っ赤になった。まったく、どこまでもつかつかッだ。」

「お、お、俺は……」

「うん？ 何だ？」

「お、俺っ！ ま、前に給湯……それで、そのっ……か、感謝っ……」

「言いたいだけは濡れそうなのに、口が上手く回らない。健一は女と同じくらい、こらやっで自分を露骨に見下してくるような男が苦手だった。」

第一章 子持ちの人間を後ろから犯す！

「何を言ってるんだ、君は誠二が顔をしかめた。」

「まともにしゃべることすらできないのか。気味の悪い男だな」

「あなた、そんなひどいこと言わないで」

「明美がおろろしながらも二人の間に入った。」

「この方は、前に話した、うちの給湯器を直してくれた電器屋さんよ」

「そういえば、そんな話をしていたな」

「しかし誠一は、健一が何者か知らずとも不審そうな表情を崩さなかった。」

「まあいい。そんなことより、早く忘れ物を取ってこない……」

「あ、待ってあなた……すみません百円さん、失礼します」

「健一の目の前で、パタンと扉扉に玄関扉が閉まった。まるで犯罪者から明美を引き離すような誠二の態度に、健一は唇を噛み締め、握り締めた拳を震わせた。」

「きよら」と辺りを見回しながら、健一はデパートの中を歩いている。作業着姿で格調高い装飾の施された店内を歩いていると、ひどく遠慮いなどころにいるような気がして落ち着かない。



「お客様、何かお探しでしょうか」

「背後から声をかけられ、健一は胸を高鳴らせて振り返った。」

「あら、電器屋さんでしたか、いらつしやいませ、本日も当デパートをご利用いただき、ありがとうございます」

「少しおどけたように言っただけ、このデパートの店員である緒川香純だ。美人だが親しみやすい雰囲気を醸した女性で、柔らかい笑みを浮かべて健一を見て、今日はどうされました？ 何かお探しですか？」

「え、ええ……あの、入院っ……友人に、み、見舞いしようと思って、そのっ……」

「ご友人って、あの事故に遭われた店長さんですか？ フワッ、電器屋さんはご友人思いなんですね」

「何を言ってるんだ、君は誠二が顔をしかめた。」

「まともにしゃべることすらできないのか。気味の悪い男だな」

「あなた、そんなひどいこと言わないで」

「明美がおろろしながらも二人の間に入った。」

「この方は、前に話した、うちの給湯器を直してくれた電器屋さんよ」

「そういえば、そんな話をしていたな」

「しかし誠一は、健一が何者か知らずとも不審そうな表情を崩さなかった。」

「まあいい。そんなことより、早く忘れ物を取ってこない……」

「あ、待ってあなた……すみません百円さん、失礼します」

「健一の目の前で、パタンと扉扉に玄関扉が閉まった。まるで犯罪者から明美を引き離すような誠二の態度に、健一は唇を噛み締め、握り締めた拳を震わせた。」

健一は、じわじわと顔が熱くなるのを感じた。艶やかな唇の間からこぼれる、跡を舐めたような上品でまらかな声で責められるのはどうも上がった。香純の笑顔はいつも営業用には見えなかった。どんなにどもつても、こちらを見る確に嫌悪感も感じない。顔や体も美しいが、香純は何より、心の美しい女性なのだと思っている。

健一が香純と出会ったのは、早川から仕事を引き継いだ初日のことだった。開店して間もない時間に故障した炊飯器を持って現れた、健一にとって最初の客。それが香純だった。どもりながら必死で対応した健一に、香純はまったくいやな顔をしなかった。炊飯器はコードが切れていただけだったので、健一は十分もかからずに修理してしまった。すぐに直ったことを香純はとても喜び、心からの感謝の言葉を言ってくれた。

その時の太陽のような笑顔を見て、健一は香純に恋をした。香純はそれからたびたび店を訪ねてくれ、ネット接続のことや最新の電化製品のことなどについて、何度も会話を交わした。話し下手で、これまで女性連から怒み嫌われてきた健一に対して、香純は一切不快な顔を見せなかった。いつだって笑顔で接してくれる香純への思いは、健一の胸の中で膨らんでいく一方だ。

告白する勇気はまったくない。それでも、健一はいつか香純といっしょになるという夢を

捨てられずにいた。

「お見舞いでしたら、花や食べるものより、実用的なものの方が今は喜ばれるようですよ。たとえばタオルとか。皆さん自分でも用意されますけど、入院が長くなると足りなくなることも多いみたいで」

綺麗な笑顔。澄んだ声。香純のそばにいらると、心臓が激しく鼓動してしまふ。熱い血液が体中を駆け回り、どんどん股間へと流れ込んでいくのを健一は感じた。

「ま、ま……」

「真つ昼間のデパートで着せられてしまふようになり、慌てて香純から目を逸らす。

「じゃ、じゃあ、タオルにしようかな」

「そう香えはしたが、せつかく香純が進んでくれるものなのだから、早川などにはやらす自分のものにしてしまおうと健一は密かに心に決めた。仕事の報告も兼ねてこれから早川の様子を見に行くのは本当だが、そんな大げさな見舞いの品を持つていくこともないだろう。」

香純の案内で、タオル売り場に向かう。並んで券けるのが嬉しくたまらなかつた。

「男性へのお見舞いで、シルシルな柄がいいと思いませんか……こちらのタオルはいかがでしょうか。今治製で、肌触りがとてもいいですよ」

「は、はい……それじゃ、それをご覧ください」

「ありがとうございます。それは、係のものに包装させますね」

レジカウンターの店員がタオルを箱に入れて包装するのを、二人で待つ。

「……あ、そうそう、私、電器屋さんにお願いたいことがあったんです」

「ふひっ、あ、と、何かあったのか、ですか……」

香純にお願ひされることになったら、電化製品のごとしか思い当たらない。思つた通り、香純は頷いた。

「実は、冷蔵庫の調子があまりよくなくて、一度見てもらえないでしょうか」

「冷蔵庫ですか？」

「はい。扉を開けても明かりがつかない時があるんです」

健一の心臓が跳ねた。冷蔵庫となれば、いくら小型のものだろうと香純が店に運んでくるのは確しい。つまり……

「あ、あ、あの……これ、冷蔵庫だっ、いえ、家に……家……み、見ることに、なりません……」

「動揺のあまり、いつも以上にどもつてしまつたが、香純が気になる様子はない。

「ええ、それで、私の家に来ていただけだかと思つたんですが」

「断る選択など、あるわけなかった。憧れの女性の部屋に入れるなんて、夢のようだよ。それに、もしかしたら明美の家にしたように、カメラを仕込めるかもしれないという期待も

あつた。以前ネットの相談を受けた時に、香純の部屋で無線LANが使えることは確認済みだ。

香純の生着替えが拝めるようになるかもしれない。そう考えただけで、股間ものが暴れてしまふようだった。

「そっ、それじゃ、いつにしようかな。早い方が、いいですよ……よねっ、」

「そう、すね、そうしてもえるとありがたいです。私、明日がちょうど休みなんです」

「……あ、でも明日じゃさすがに急過ぎます？」

「あ、いえ……明日は、あ、朝に一件しか仕事、ありませんから……ただ、大丈夫です……ッ！」

「本当ですか？ それならぜひ、明日の午後からお願ひします」

「香純が嬉しそうに笑つた。

電器屋を手伝うことにして、本当によかつたと思つた。健一はしみじみ思つた。

健一は飛行機に乗つたことがほんの数回しかない。だから海外にある空港に来たのは、本当に久しぶりのことだった。

健一は飛行機に乗つたことがほんの数回しかない。だから海外にある空港に来たのは、本当に久しぶりのことだった。

